

話 題

第6回世界水産学会議参加報告

黒倉 壽,¹ 佐藤秀一²¹東京大学, ²東京海洋大学

早いもので、第5回世界水産学会議をパシフィコ横浜で開催してから、もう4年が経とうとしています。この度、日本水産学会国際交流委員会の委員として、スコットランドのエジンバラで開催されました第6回世界水産学会議に参加して参りました。本会議はイギリス諸島水産学会主催で、Sustainable Fisheries in a Changing World をメインテーマに5月7日から11日までの5日間、開催されました。筆者らは5月7日にエジンバラに到着し、5日間滞在しました。エジンバラはスコットランドの首都であり、イギリス北部ではグラスゴーと並ぶ重要な都市であり、旧市街と新市街は世界遺産の文化遺産に登録されているほど、街並みがきれいところです。

今回の大会には、世界各国から約1,300人の参加があり、9のセッションに分かれて、口頭発表がなされました。また、ポスター発表は液晶ディスプレイを用いるE-ポスターという方法で行われていました。日本からは、口頭発表に36題、ポスター発表に約30題と多数の発表がなされました。このように、日本からの参加者はこれまでの世界水産学会議よりも多く、50人以上であったと思われます。講演要旨は、大会参加者にメールで公開されていました。

5月8日には開会式が開催され、チャールズ皇太子が臨席され、挨拶されました。基調講演は、米国ワシントン大学のRay Hilborn教授とYoung's Seafood LimitedのMike Mitchell氏によりなされました。その後の一般公演の内容は、世界水産学会議の主催者によって、編成が偏る傾向にあります。前回、横浜で開催した時は日本水産学会大会と同様に水産学の全ての分野をカバーしたのですが、今回は水産資源に重点をおいた大会となりました。その為、水産食品科学やポストハーベストに関する研究発表はほとんどありませんでした。大きな口頭発表の会場では、液晶プロジェクターを用い、パワーポイントのファイルで行われましたが、中にはPDFファイルの発表もありました。また、40人程度収容の小さな会場では、50インチほどのディスプレイで発表が行われ、後ろの方に座っている参加者には、見易いとは思えない状況でした。

お昼時間を挟んで、世界水産学協議会(International Council of Fisheries Society)の年次会議が行われ、ア



開会式で挨拶をするイギリス諸島水産学会長のIan Winfield博士

メリカ水産学会、イギリス諸島水産学会、韓国水産科学会、日本水産学会、メキシコ水産学会、ブラジル水産学会、オーストラリア水産動物学会からの代表者が出席しました。最初に次の4年間の会長にアメリカ水産学会のDoug Beard博士が選出されました。また、副会長には日本水産学会の渡部終五会長が選出されました。そして、2016年に開催される第7回となる次の世界水産学会議の開催地を決定しました。オーストラリアのアデレード、アメリカのアンカレッジ、韓国の釜山およびインドが立候補し、それぞれ説明を行いました。残念ながら、インドからの説明はありませんでした。協議の結果、次期開催地は韓国の釜山に決定しました。開催時期は前述した通り2016年の11月の予定です。

夕方にはポスター発表の前半が行われました。今回は前述したようにE-ポスターという方式に行われました。これは40インチ以上の大きな液晶ディスプレイが約30台用意されており、3台毎にPodといわれる10のグループに分かれ、指定された時間に指定されたPodで待機します。興味のあるポスターを見に来た参加者が来ると、ディスプレイに自分の発表を映し出します。ポスターといっても、1枚ではなく3枚程度のパワーポイントでの発表です。

2日目の9日午前の発表は、東京大学大気海洋研の塚本勝巳教授の基調講演で始まりました。満員の聴衆を魅了するウナギに関する講演でした。その後、一般公演があり、夕方にはまたポスター発表の後半がありました。ポスター発表用のディスプレイは、2日間備え付けられており、いつでも大会参加者はどのディスプレイからでも、興味のある演題を見ることができます。印刷したポ



ポスター発表する日本からの大学院生



一般会場で講演する塚本先生

スターをわざわざ、大会会場まで持っていく煩わしさはなく、非常にスマートな方法だと思われるのですが、ディスプレイが多くないとうまく進行しないと思われます。

3日目の10日は、World Fish CenterのMaolcolm Beveridge博士の基調講演から始まりました。そして、この日の夕方にはCongress DinnerがMurrayfield Stadiumで行われました。この競技場はラグビーの試合場で、ヨーロッパにおいても最も有名な競技場の一つだそうです。芝生のフィールドに入って、ウェルカムドリンクが飲める予定でしたが、生憎の雨の為、ドリンクサービスは屋内になりました。その際に、第2回の国際水産科学賞 International Fisheries Science Prizeの受賞者が発表されました。今回は英国Hull大学国際水産学研究所長のIan G. Cowx教授が受賞しました。同教授は、世界各地における淡水魚の系群の保護やその水産業の利用について研究し、今までに、多くの留学生を教育し、30人以上の博士を育ててこられました。Dinnerのメニューはやはり水産学会議だけあり、メインディッシュはタラでした。

4日目、最終日は世界銀行のJames Anderson博士の基調講演で始まりました。午後の一般公演では、水産政策委員会の黒倉 壽がReconstruction of fisheries industries and fisheries communities after 2011 Japanese tsunamiという題目で講演しました。話題性がある多くの関心を集めるものと期待されましたが、小さな会場が満席になる程度の聴衆で、ヨーロッパではあまりこの問題に関する関心はないようでした。しかし、集まった聴衆の関心は強く、いくつか質問がありました。その中に放射線物質の汚染に関する質問が1つありました。

その後、閉会式が行われました。会長が一人で式を進行させる形式で、あまり演出臭のない淡々とした閉会式でした。その中で、韓国水産科学会の南会長が、次期開催国の代表として挨拶しました。この時使われたプロモーションビデオは専門家の演出・編集によるものと思われ、画像が美しく、韓国の意気込みが感じられました。

次回の世界水産学会議は、お隣の韓国、釜山で開催されます。日本から大勢の日本水産学会員が参加されることを期待しております。